

第3章 総合的な学習の時間、特別活動等の研究

1 BIWAKO TIME

探究的学習活動の過程で自ら学びを深める総合学習「BIWAKO TIME」の実践

山下 亮

本論の要旨

本校が取り組む「BIWAKO TIME」は、36年に及ぶ長い歴史を持ち、全校体制で取り組んでいる総合学習である。時代とともに少しずつ修正と改善を重ねながら現在に至っており、「郷土である滋賀」を学習フィールドとし、「学び方を学ぶ」調査研究型の学習を継続している。生徒たちが卒業後の人生においても活用できる「生きる力」を養う学習の場として、本校独自の研究課程である「情報の時間」とともに、必修教科等の学習で得た知識や体験を生かし、より活用できる「学び」へと再編することや、学習指導要領に則した授業時数に対応させつつ展開してきた。

本年度は、本校の研究主題にある「実社会に生きて働く力の向上」を受けて、「WONDER～なぜからはじめる「BT」～」というテーマで、生徒の主体的な活動の中で課題を突き詰めていく学習の過程を大切にしてくことを目指した。

キーワード 探究、論理的思考、実社会、グループ学習、テーマ設定

1. 「学び方」を学ぶ「BIWAKO TIME」の概要

「BIWAKO TIME」（以下BT）は、36年に及ぶ長い歴史を持つ。社会で求められている学力や本校生徒の実態などを踏まえながら、少しずつ修正と改善を行い、「総合的な学習の時間」として、全校体制で取り組んでいる学習である。

その目的は、「郷土である滋賀」を学習フィールドとし、調査研究活動を通して「学び方を学ぶ」ことである。具体的には、各教科の学習で得た知識や体験を生かせるように、逆にBTで学んだことを各教科での学習で生かせるように、「学び」をより活用できる力へと再編することである。

また、グループ活動による課題発見・解決学習や、夏季・秋季休業をはさんで25時間という長期にわたる学習を実施していることも大きな特徴である。

BTでは、以下のように学習の段階に合わせて、5つの活動場面を設定している。

生徒がBTの学習を3年間積み重ねることで、確かな学び方を身につけられるように計画している。

- ① 課題の発見と計画(4時間)
- ② 調査研究活動(9時間)
- ③ 中間整理(2時間)と発表準備(5時間)
- ④ まとめと発表
(交流会2時間、代表発表会2時間)
- ⑤ 学習の反省とまとめ(1時間)

課題の発見と計画には、「全校ガイダンス」を行っている。課題追究のためには、中心の活動場所とな

るベースルーム以外にサテライトルームを用意している。情報図書室、コンピュータ室、技術室、家庭科室、理科室、職員室のそれぞれに担当指導者がおり、書籍やコンピュータ(情報の処理やWebサイト閲覧による調査)、電話やファクシミリなどの使用、研究模型や実験装置の製作、伝統食などの調理などにも対応できるようにしている。さらに、博物館などの社会教育施設、大学などの教育研究機関、滋賀県庁などの行政機関を訪ねたり、地域の方々の協力を得たりしながら研究活動を進めたりしている。生徒は一人1冊「BTワーク」を所持しており、日々の活動での成果を記録していく。BTワークの中には情報収集・交流の場面で役立つ思考ツールや活用方法が記載されており、各教科での経験を活かしながら、それらを調査研究活動で役立てている。

調査研究の時間と発表準備の時間を明確に区別して取り組んでいる。発表には、A5サイズのコピー用紙のスライドを中心に、模造紙やパソコンによるスライドなど、複数のものを活用している。

研究の成果については、ベースルームごとに発表を行った後、最終的には各ベースルームごとの代表のグループがBTのテーマである「学び方を学ぶ」に関わって、これまでの研究成果を整理し、交流する場として、まとめの集会を行っている。

2. これまでの変遷

昭和58年(1983年)から郷土環境学習としての「びわ湖学習」の実施が始まった。当時は特設の学習であったが、現在の総合的な学習の時間の先駆けであ

った。それと並行して、平成3年(1991年)から3年生で特設の「環境学習」と「国際理解学習」が実施されるようになった。しかし、学習内容や学習方法が重複し、多岐にわたってきたため、平成6年(1994年)に整理・統合を図り、「びわ湖学習」、「環境学習」、「国際理解学習」を合わせた「BIWAKO TIME」(BT)となった。平成20年(2008年)度から、本校独自の研究学習課程である「情報の時間」での学習成果を生かし、思考力の向上を目指すため、思考ツールをワークブックに掲載し、生徒に活用させるように指導するようになった。近年は、平成24年(2012年)度から実施された現行の学習指導要領へのスムーズな移行を意識し、学習の時間をより一層、「学び方を学ぶ」場にしていくため、学習計画の精選を進めた。時数については、展開内容を精選し、25時間(1年生ではBTのねらい等のガイダンスに追加の1時間を設けている)で実施している。

これまでBTで培ってきたノウハウと実績を大切にしながら、「学び方を学ぶ」ということに特化し、調査研究活動から研究成果の発表に至るまで、生徒自身の問題解決に基づいた探究学習を目指した。このような点で、新学習指導要領の目指す「主体的・対話的で深い学び」に適う総合学習であるといえる。

3. 本年度の取り組み

(1)BTの学習計画

本年度については、例年通りの学習を効果的に展開していくことを意識しながら「情報の時間」や各教科で身につけた力をBTでうまく活用できるようにカリキュラム・マネジメントの視点を取り入れて教員全体で検討した。

時間	日時	学習内容
1	4/25(木)	○総合学習ガイダンス 総合学習のガイダンスを聞き、希望するテーマを決定。
2 3 ●	5/24(金)	○グループシンキング① 各自の問いを交流し、グループを編成し、グループの問いを決定する。
4 5	6/12(水)	○グループシンキング②／研究テーマ決定／面談 グループのテーマを設定し、仮説を立て、研究計画書を立てる。また面談を行い、アドバイスをふまえ計画を改善する。

6 7	6/19(水)	○調査研究活動① 調査研究活動を始めるための諸準備をし、活動を始める。
8	6/25(火)	○調査研究活動② 校外活動や夏休み中の計画を立てる。
9 10	7/3(水)	○調査研究活動③／OPE1 研究の問いと仮説、具体的な計画を立てる。校外活動可能日。
11	7/10(水)	○調査研究活動④ 夏休み中の計画や9月の校外学習について計画を立てる。
	夏休み	○調査研究活動 調査研究を継続して行う。
12	9/4(水)	○中間整理1 夏期休業中の調査研究活動について思考ツールなどを用いてまとめる。
13	9/11(水)	○中間整理2 最後のOPEや研究の方向性についてベースルームの先生と相談したり、計画を立てたりする。
14 15	9/18(水)	○調査研究活動⑤／OPE2 校外活動可能日
16 17	9/25(水)	○発表準備① 交流会の原稿をつくる。
18 19	10/7(月)	○発表準備② 交流会の原稿をつくる。
20	10/16(水)	○発表準備③ 交流会のリハーサルをする。
21 22	11/6(水)	○テーマ別調査研究交流会 ベースルームごとの発表会。
23 24	11/14(水)	○反省とまとめの集会 学習のねらいに合ったグループを前に、「学び方を学ぶ」ことができたかを確認する。
25	11/18(月)	○まとめと反省 今年の研究をしっかりとまとめ、今後の学習につながるようにする。

※実際は、反省とまとめの集会については11/14が臨時休校になったため、反省とまとめの集会は12/2に実施した。

※●は本稿で具体的な実践を取り上げる取り組み

(2) BT の学習目標

BT では、次の 5 点をねらいとしている。

- ①課題発見や解決の仕方、学習成果の発表などの学習過程を通して、生きてはたらく学び方を身につけさせる。
- ②学際的研究を通して、課題追究の技能を習得させ、幅広いものの見方や考え方を身につけさせる。
- ③自主的・主体的に学ばせるとともに、仲間と協力して学ぶ態度を身につけさせる。
- ④郷土・地域やびわ湖についての認識を深めさせ、それらとともによりよく生きようとする態度を身につけさせる。
- ⑤身近な課題が、広く社会・世界の課題に通じていることを認識させ、現在や未来の社会をよりよく創造していこうとする意欲を喚起する。

さらに、BT で育てたい生徒の姿として、次の 3 点を掲げている。

- 自然環境や伝統・文化、現代社会の在り方やその関わりについて考えることができる。
- 先人の残してくれた大切な宝や滋賀に息づく文化をいつまでも守り育てることができる。
- 自分たちが考えたことを次世代に引き継ぐ努力を实践できる。

以上をふまえて、BT の各学年の目標を以下のようになっている。

【1 年生】

- 自主的・自発的を意識し、先輩方と協力し、先輩方から学ぶ態度を大切に取組もう。
- 「課題の発見」⇒「課題の解決」⇒「自己評価」という学びのプロセスを体験し、考え方や学習の方法を身につけよう。

【2 年生】

- 前年度の学習をもとに、後輩を教え、先輩を支える学習グループ内の中堅的な存在として積極的な姿勢で学習に取り組もう。
- さまざまな分野にかかわる研究での課題の見つけ方や探り方の技能を習得し、多角的なものの見方や考え方を身につけよう。

【3 年生】

- 1・2 年生での学習をもとに、学習グループ内のリーダーとしてグループの活動を指揮しよう。
- 郷土・琵琶湖についての認識を深め、先人たちの残してくれた宝物をいつまでも大切に守り育て、滋賀に息づく文化とともに次の世代に引き継いでいく意欲や態度を身につけよう。

(3) 本年度の BT テーマとねらい

平成 12 年(2000 年)頃から、インターネットの普及に伴い、調査内容が何かの文献のコピー・貼り付けを通して引用するだけであったり、根拠が明示できないあやふやな条件で調査をしていたり、発表方法の演出効果にこだわった「作品」づくりや、発表したりしても質疑の出ない「発表会」となる傾向が見られたり、調査研究型の総合的な学習の時間としての課題が見えてきた。

そこで、これを改善すべく、毎年テーマを BT 担当が設定し、1 年間の BT の軸としている。

本年度の BT テーマ 「WONDER」～なぜからはじめる「BT」～

本校学校目標の「郷土を愛し世界へはばたく心豊かな生徒の育成」を念頭に置き、各教科の時間や日常生活の中での疑問を大切にしながら、国際的視野に立ち、創造的な知性と正しい判断力を BT の学習活動の中で養われることを期待して本年度のテーマのねらいを設定している。また、探究的学習活動を通して自ら課題を見つけ、解決する学習過程の中で、自ら掲げたテーマや問いの最適解を、グループ内外の話し合い活動で論理的思考を行いながら探究し、今までの知識と新しく獲得した知識がつながって学びが深まっていけるように以下のような手立てを講じた。

(4) テーマの決定とグループ編成

探究的学習活動の根底を支えるのは、生徒の主体的に考え、学ぼうとする学習意欲である。生徒自らが学びたいと思う研究テーマを追求しながら、グループ学習に取り組むために、グループ編成は大変重要なものである。そこで、教員がこれまでの研究テーマをカテゴライズした。(分類については表 1 に示す) そうすることで、生徒の希望にできる限り沿えるようにグルーピングできるように配慮した。

表 1 カテゴリー表

分類1	100 歴史	200 社会科学	300 自然科学
分類2	101 伝記	201 行政 (政策・法律・ 条例)	301 地学 (地質・鉱 物・地形な ど)
	102 遺跡 (古墳・城 跡・住居跡 など)	202 風俗習慣 (生活のなら わし・衣食住 等)	302 生物
	103 伝説	203 教育・福	303 植物

	(伝承・昔話など)	祉・人権	
	104 伝統 (信仰・風習など)	204 環境問題	304 水環境
分類1	400 産業・経済	500 芸術	600 言語・文学
分類2	401 第1次産業 (農・林・水)	501 絵画・書道	601 言語 (方言・語源・ことわざなど)
	402 第2次産業 (工) (加工・製造・建設・伝統工芸)	502 諸芸・娯楽 (落語・演劇・映画など)	
	403 第3次産業 (商・運輸)	503 音楽・舞踊	602 作品・作家
	404 通信産業	504 スポーツ・体育	

表1から、分類1と分類2を選択し、希望用紙にその選択した分類の中で、興味があること・調査したいことを具体的に書かせた。本年度は出来る限り生徒主体でグループが編成できるような形にした詳細については、後の実践事例で述べる。

BTのグループは、「3学年の異学年合同」を特徴としてきた。また、できるだけ男女混合になるようにしている。その目的は、これからの社会の中で生きていく協働の力を伸ばすためである。現在、社会に多種多様な考え方や価値観がある中で、意見の合意をしたり、見方や考え方を深めたり、広げたりすることが重要である。BTを通して、これらの力を身につけることもねらいとしている。本年度についても、なるべく各自の掲げる研究テーマに沿って調査を進めていけることを重要視し、「異学年合同」の条件の下、グルーピングをさせた。



図1 異学年合同グループでの取り組みの様子

テーマの決定については、思考ツールを活用しながら以下のような手順でグループごとにテーマを決定させた。

STEP①：テーマの分析。KJ法で調べたい内容とそれについての疑問、意見を出し合った。
STEP②：出てきた情報・キーワードの整理。次に、似ている内容ごとにグループ分けし、関連づけられないかを考え、キーワードを絞っていく。
STEP③：研究テーマ名&「問い」の決定。絞られたキーワードを基に、テーマと問いを決める。

この最初のテーマと問いの決定は今後の調査研究の中の中心になってくるので、各グループにベースルーム担当教員との面談を必ず行うようにさせた。面談のポイントは以下の4つである。

- ①テーマ&問い&仮説は適切か？
- ②仮説検証のための「何が言えるとよいか」は適切か？
- ③「何が言えるとよいか」のための「データ」は適切か？
- ④「データ」収集のための「調べ方」は適切か？

教員は、説明を聞く中で、疑問に思うこと／抜けていると感じること／漏れている情報／重複している情報／本当に充実した研究ができるのか／何を明らかにしたいのか／などを指摘しながら、生徒の思考にゆさぶりをかけるようなアドバイスを与え、生徒の思考を深めることを意識して行った。また本年度のテーマについては表2に示す通りである。



図2 担当の教員と面談を行っている様子

表2 本年度のテーマ一覧

分類	テーマ
歴史	大阪城と長浜城を比較する
歴史	彦根城の軍事的役割～戦略や武器の変化・地域特性の視点から～

歴史	坂本城の謎を解き明かす
歴史	明智光秀と坂本城の関連性
歴史	大津祭を誰もが行きたい祭にする
歴史	大津事件のその後
歴史	近江国の家紋のルーツと分布
歴史	三上山のムカデ伝説と藤原秀郷の関連
歴史	明智光秀の滋賀県との関わりとその魅力に迫る！～大河ドラマの PR とその重要ポイント～
歴史	安土城の立地と建設について
社会科学	おいしくのぼそう平均寿命
社会科学	水質改善と可視化の可能性
社会科学	ごみと琵琶湖～ごみが琵琶湖にもたらす影響
社会科学	滋賀県民の生活習慣と長寿の関係
社会科学	船幸祭の継承と発展
社会科学	高校入試の記述量と学力状況調査の関係性について
社会科学	世代別で利用できる避難グッズを考えよう！
社会科学	事故を防ぐオリジナルの飛び出し坊やを作ろう！
社会科学	滋賀県の伝統食品から新たな食品を作ろう！
自然科学	琵琶湖をウナギの繁殖に適した環境にするために自分たちにできることはないだろうか。
自然科学	ビワコムシをこれ以上ふやさないようにするためには？
自然科学	在来魚の減少を止める！
自然科学	琵琶湖(南湖)を透明に戻そう
自然科学	ブルーギルやオオクチバスを減らす方法
自然科学	外来種の分布とその条件
自然科学	2018 年以降のブルーギルの減少について
自然科学	琵琶湖の悪臭を軽減しよう
自然科学	これからの外来種の魚の数について
自然科学	全層循環が湖底の生物に与える影響
自然科学	全層循環に代わるものを探る

自然科学	新たな滋賀県と大津市のシンボルを決めよう
自然科学	琵琶湖の生物の進化
自然科学	オオバンと琵琶湖の関係
自然科学	伊吹山の魅力を伝えよう
自然科学	南海トラフが起こったときの他県との被害の違いについて
自然科学	大津市で南海トラフによる被害拡大を防ぐには
自然科学	琵琶湖に住む生物の保全について
自然科学	南海トラフによる滋賀への被害
自然科学	南海トラフの危険なところとそれに対する対処法
産業経済	日本茶発祥の地 滋賀県
産業経済	住みやすい滋賀
産業経済	滋賀のええところ再発見！
産業経済	滋賀県に人気の観光地を開発しよう！
産業経済	滋賀県のスイーツとその特徴を PR しよう！
産業経済	世界に通用する建築とは～近江の世界的建築家小堀遠州に迫る～
産業経済	滋賀県の観光業をさらに発展させよう！
産業経済	大津・草津と湖北の発展の違い
産業経済	黒壁スクエアを観光者数滋賀県 1 位の観光スポットにしよう！
産業経済	琵琶湖真珠の良さを伝えよう
産業経済	滋賀でお土産革命を起こそう！
芸術	滋賀書道の起源と評価基準に迫る
芸術	滋賀県と競技かるたのつながり
芸術	滋賀のロケ地に観光客を呼び込もう
芸術	カロムを滋賀から全国へ
芸術	滋賀県のスポーツ選手の特徴
芸術	滋賀をスポーツで活性化
芸術	ビワイチで滋賀を盛り上げよう！！
芸術	ビワイチの普及

言語・文学	グーパー分けの掛け声の区分
言語・文学	湖北弁を守ろう
言語・文学	近江弁を使ってみよう！
言語・文学	オリジナル映画で滋賀にインパクトを与えよう！
言語・文学	滋賀のロケ地観光地大作戦
言語・文学	連続テレビ小説と滋賀のロケ地について
言語・文学	滋賀の観光客を増やすにはどうしたらよいのか
言語・文学	滋賀のドラマのロケ地Bookを作ろう！
言語・文学	滋賀県民に方言の魅力をPRしよう

(5) 調査研究について

生徒たちの調査研究のなかで、調べたいことを分担している姿がよく見られる。それ自体は、グループで調査を進めるメリットである。実際、BT の時間中にメンバーそれぞれが調べたいことを調べることにより時間を有効に使うグループが大変多く見られる。しかし、調査した内容をグループでまとめたり、分析したりすることが大変重要である。本年度についても、BT の時間中の調べ学習は原則として禁止し、調べたいことは BT の時間までに調べてきて、BT の時間には調べてきた内容をグループでまとめたり分析したりするように指導した。

また、調査研究活動の範囲を広げるため、外部の方との連絡や情報収集が必要になるときがある。担当教員と生徒が事前にアポイントメントを取り、校外活動を行える時間割設定をオープンエンド(以下、OPE)といい、そういった機会も情報収集の大切な場となる。



図3 調査研究活動(OPE)の様子

現在、BT 終了時には、まとめの時間を 10 分間確保しているのだが、この時間を充実させたい。ベースルーム担当の教員は、「調査研究で明らかになったこと」と「次回の BT までに調べてくること」を報告するよう生徒に指導し、習慣として定着させることが次の学習を深めることにつながるはずである。また、BT ワークにも「活動の振り返り」と「次回に向けて」という欄が設けられており、この部分の具体的な書き方を指導することも大切だと考えられる。

また、ある程度、調査研究が進んでくると、最初に立てた計画とずれが出てくることが見られたり、新たな疑問や課題が出てきたりすることがある。そのようなときに生徒たちの調査研究を深めていくためには、教員の支援が欠かせない。そこで夏休みが明けてから、2 回目のベースルーム担当教員と今までの調査で明らかになったことや、困っていることなどについて面談の機会を持った。

(6) 面談と中間整理について

本年度においても、昨年度より設定しているベースルーム担当教員との「面談」と、グループ内で交流し、今までの調査内容を整理する「中間整理」の場を設定した。生徒が対話的な学びの中で自身の考えや意見を深めるきっかけとする目的である。また、課題解決の手がかりを得ることや自らの問いに対する新たな疑問を持たせるために、どのような整理方法で、どの思考ツールを活用すればよいか、生徒自身に選択させる場面を設定した。

(7) 「テーマ別調査研究交流会」「まとめの集会」

テーマ別調査研究交流会の目的は、約半年間にわたり取り組んできた「調査研究の内容」、そこから「わかったこと」「考えたこと」(考察)、そして「伝えたいこと」(主張)を、相手にわかりやすく、論理的に発表することと他のグループの発表を自分たちと比較しながら聞き、良さを評価したり、疑問を出し合ったり、足りない部分を補ったりしながら、みんなで深め合うことの 2 点である。2 つ目の目的を達成するためには、発表を聞く観点が重要である。

(8) 「BT レポート」について

昨年度に引き続き、各自が BT を通して何を学んだかを明確にすることを目的として、レポートの提出を生徒に課した。調査内容を各自が論述することで、深い調査研究になることが期待される。

また、次の探究的学習活動につながっていくことを目指し、次に探究したい内容も論述させた。

4. 実践事例（グループシンキング①）

平成 31 年 (2019 年) 5 月 24 日実施

(1) 本時の目的

- ・考えてきた課題をもとに各自の問いを交流し合う。
- ・各自の問いを交流した後、グループ編成に向けて問いの精選をしていく。
- ・異学年合同グループを編成する。

(2) 本時の取り組みの様子について

これまでの BT の取り組みを振り返る中で、「グループによっては前向きな表情で取り組むことができていない生徒がいる」という反省点があった。このことは、その生徒にとって BT が主体的な学習になっていないということになる。例年まではグループ編成の時に各自が調べたいという希望調査はとるものの、教師がグループのメンバーをすべて決定してしまうので、どうしても自分の調べたいテーマが最終的なテーマと大きくずれてしまい、学習意欲が薄まることがその要因ではないかと考えた。そこで、その反省点を修正するために本年度は、今までとは異なる形式でグループ編成を試みた。まず 5 月の連休を利用し、BT の学習に入る前段階として、全学年に日常の生活場面における疑問や問いを、また 2, 3 年生については前年度の BT を振り返り、そこから出てきた新たな問いを書き出させる課題を出した（図 4 参照）これを受けて各自の希望するテーマごとに一旦 14 グループ（1 グループ 30 人程度）に

分けた。そこからは各グループの中で各自が課題として持ってきた問いを交流させ、KJ 法を利用して、お互いの問いを整理してグループをできるだけ生徒達中心で編成を考えさせるという取り組みをした。

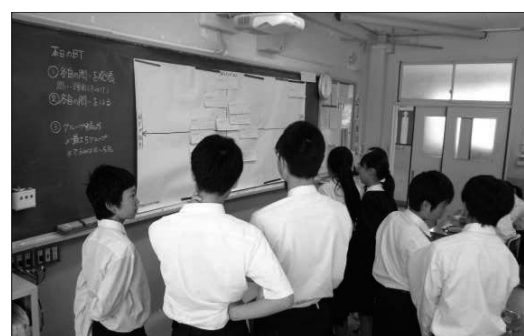


図 5, 6 問いの交流 & グループ編成の様子

生徒は各ベースルームで順番に自分の問いを全体で発表し、その後自分の問いを「値打ちがある or ない」を縦軸に、「調査が困難 or 簡単」を横軸にとった模造紙のどのあたりに位置するかを考え、貼り付けた。最後は全員の問いについて、KJ 法を利用し、同じ分類にまとめたりしながら、グループ分けを行った。

5. 成果と課題

本年度の BT について、グループ編成については例年と異なる形式をとったことに伴い、次年度さらによりよい学習にしていけるためにも全校生徒 (310 名) にこの形式についてのアンケートをとった。表 3 にそのアンケートの結果を示す。生徒のアンケート結果からも今回のグループ編成の方法について、肯定的に捉えている生徒がかなり多いことがわかる。よって、生徒達の探究学習をより深めていく手立てとして、このグループ編成の方法を引き続き実践することに意味があるのではないと思われる。ただし、課題として挙がってきている主なものとして、「グループ編成に時間がかかりすぎて調査研究の時間が十分に確保できなかった」、「学年や性別の偏りが見られる」といったことを今後解消していくことが求められる。

2019 BIWAKO TIME

連休中の課題 & 希望調査

～本年度の BT を充実させるために～

1 年生は B コースに、2, 3 年生は A・B コースに取り組もう！

A コース (2, 3 年のみ)	B コース (全学年共通)
昨年 (一昨年度) の BT から生まれた「新たな問い」	自分の興味・関心から生まれた「新たな問い」
振り返ってまとめてみよう！ 昨年度 (一昨年度) の BT で学んだことの概要	4 / 27 ~ 5 / 6 の 10 連休中で生まれた問い
	上記の「問い (疑問)」がうまれるきっかけとなったもの
	・自分で少し調べてみたこと
① 歩道の BT を繋げての新たな問い	
②	
③	

希望調査 ※番号については裏面を参照

第 1 希望	第 2 希望	第 3 希望
分類 1 番号 項目	分類 1 番号 項目	分類 1 番号 項目
分類 2 番号 項目	分類 2 番号 項目	分類 2 番号 項目

1 D () 名前 ()

図 4 連休中の課題

表3 生徒アンケートの結果

質問

今年度は各自の問いを交流した上でグループを編成しました。この編成の仕方はよかったですか？編成の仕方について意見がある場合はそれを書いてください。

- ★よかった … 66 % (202 人)
 ★よくなかった … 11 % (34 人)
 ★どちらともいえない … 23 % (74 人)

(よかったと答えた生徒)

- ・初めからチームが編成されるよりも、自らの課題を自分で選び、チームを認識する方が目的に対して意識を持てるから。
- ・同じことを調べたい人が集まったため、意見交流がしやすかった。
- ・最初からどんな問いにするかが決まっていたので、具体的に何を調べるか早く決められた。
- ・自分が調べたいと思っていたテーマよりも、他の人が提案したテーマの方が調べたいと思ったり、より研究を深められるのではと思うから。
- ・全員がテーマを理解し、しっかり活動ができていたから。
- ・もとの設定がある程度決まっていたから、テーマ設定がすごく楽だった。

(よくなかったと答えた生徒)

- ・好きな人同士で集まってしまう、話が進まない。
- ・結局仲のよい人などになってしまうグループも見られたので、よくない面はある。
- ・生徒だけで決めると、学年ごとの人数にばらつきが出てよくないと思いました。

(どちらともいえないと答えた生徒)

- ・交流したときに候補に挙げられなかったテーマの人が自分のテーマについて調べられなかった。
- ・知らない人とやるのもいいが、友達の方が効率が上がると思う。
- ・グループを決め方はよいが、決めるまでに時間がかかるので、調査研究の時間がもう少しほしい。

最後に、一年間の学習活動の中で本校職員が指導に当たって改善すべきと挙げたものを以下に示す。

- ・グループ分けを考える2時間が、グループで考えるために時間を減らし、面談までが不十分であることが多かったように感じます。
- ・授業者がいかに関心の発表を意識して指導できるかによって、指導の質が変わってくると感じました。
- ・(グループ編成について)当初の心配よりは、スムーズに決まったと思いますが、少数派の生徒は全然違うテーマの所へ入るかたちとなってしまったので、中には面白いテーマもあり、もったいなかったと思います。
- ・やはり、テーマと問いは大変重要であると感じます。テーマ・問いを考えさせる時間をしっかりと取り、もう少し枠を広げて考えさせてもよいのではないかと思います。まず、興味のある内容を挙げ、そこから滋賀へつなげてみてはどうでしょうか。滋賀から入ると、これまで扱ってきた内容ばかりとなり、毎年同じような研究で終わってしまいますので。
- ・深めたいテーマに沿ってグルーピングできたのはよかったが、学年の偏りをよしとするかどうか…3年生が多すぎて進めづらかったグループもあったように思います。

現在は25時間という限られた時間の中で、このBTを実施しているが、学習の要となるテーマ決定やグループ編成に時間をかけるとその後の調査研究の時間が削られることにつながる。このあたりについて、「時数を増やす」、「BTの計画を見直す」などしながら、いかにクリアしていくかが次年度以降の課題となりそうである。本校の学習活動の中心となるこのBTをさらによりよくできる方法を今後も模索していきたい。

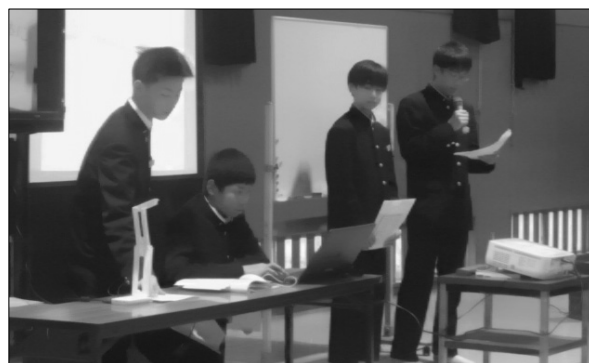


図7 まとめの集会の様子

6. 引用・参考文献

- ・原田 雅史「探究的学習活動の過程で自ら学びを深める総合学習「BIWAKO TIME」の実践」『滋賀大学教育学部附属中学校研究紀要』61集